

特40

579

東 京 圖 書 館

和書門

小説類

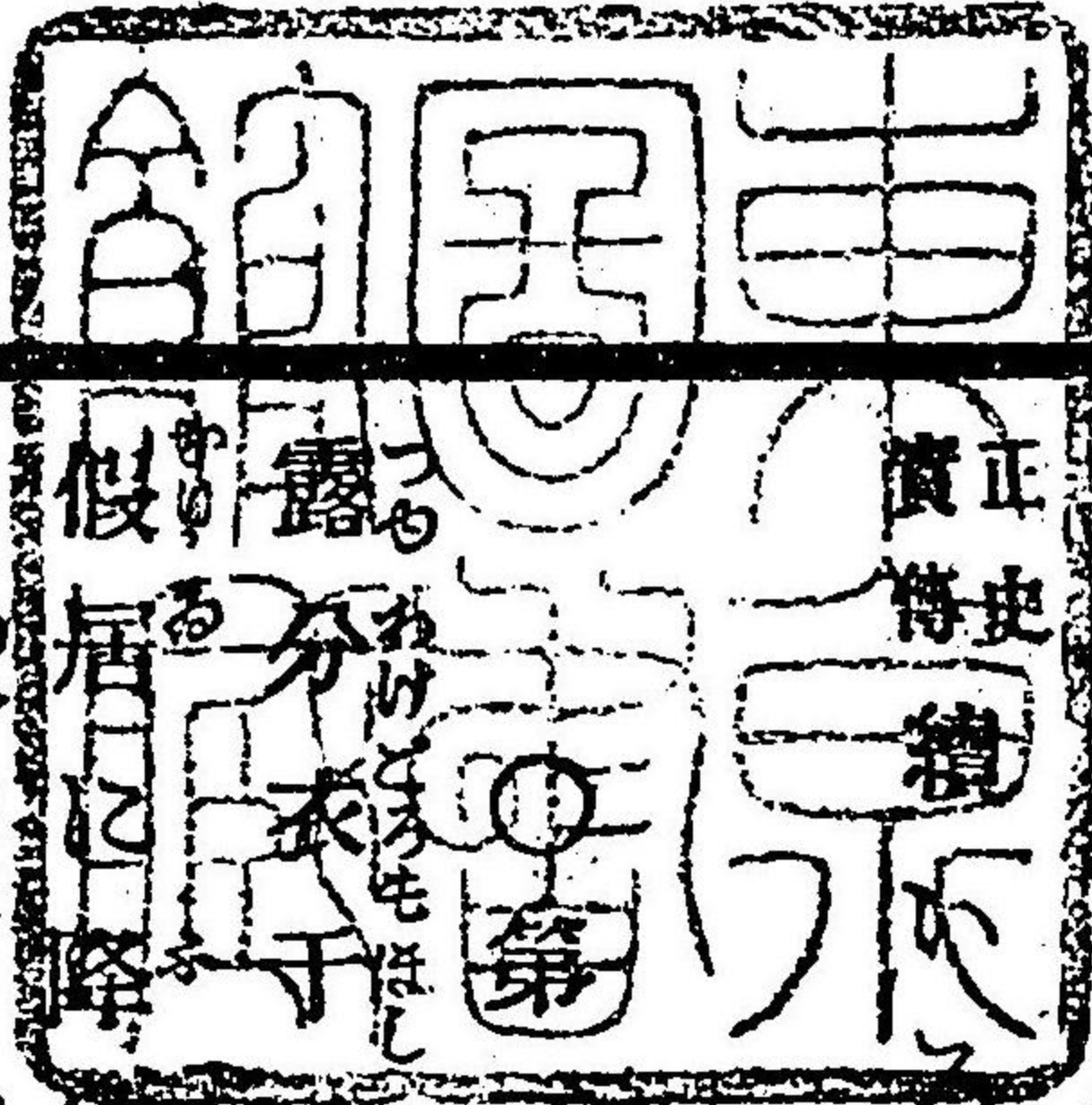
函

別三架

五九號

三冊

續
い
は
文
庫



正史續

は文庫第二輯

第三回

柳亭種彦編次

假^{かり}居^ゐに^に降^りる^る時^{とき}雨^{あめ}の^の空^{うら}う^うち^ち仲^{あは}ぎ^ぎ都^{みやこ}の^の方^{かた}を^を忍^{しの}ぶ^ぶ昔^{むかし}
 の^の弓^{ゆみ}取^{とり}の^の矢^や間^ま喜^き兵^へ衛^ゑの^の商^{あき}人^{うを}と^と姿^{すがた}を^を變^{かへ}て^て石^い町^{ちやう}の^の
 旅^{はた}籠^ご屋^やに^に逗^ど留^{りう}せ^せし^しが^が兼^{かね}て^て覺^{かく}期^きよ^よ惜^{をし}か^から^らぬ^ぬ身^みよ^よ
 も^も淋^{しみ}し^しき^き雨^{あめ}を^を詫^{わひ}て^て「[「]ち^ちよ^よつ^つと^と入^い湯^{たう}を^を忘^{わす}れ^れあ^あが^がら^ら。
 近^{きん}所^{じよ}で^で買^{かひ}物^{もの}を^を忘^{わす}れ^れて^て來^くる^るか^から^ら。同^{どう}商^{しやう}買^{ばい}の^の者^{もの}が^が來^き
 々^々さ^さう^う云^いつ^つて^て置^おい^いて^て下^{くだ}さ^さひ^ひ。と^と下^げ女^{ぢよ}に^に斷^{ことわ}り^り立^たて^て出^いで^て十^と

足ばかりも行向ふより、宗「イヤよ、所て矢間氏
喜「是ハ服部。てはな、今てハ、鑄屋宗伴どの打絶
て御無沙汰を致し、お。御家内中御異も御座ら
ぬ。シテ此雨中を何處へお出かけだぬ、宗「實ハ
只今君の御旅宿を尋ねて参るや、ころき、喜「それ
ハ、丁度よ、お。今般拙者が江戸表へ下つ
ゝ事を如何して御存知で、宗「さればサ。先達て上
野の山内で織部老人にお目に懸り、内々君の御
旅宿を承知致して参りま、喜「然らば是から
手狭な旅宿へ御同行致さ、宗「イヤ、御旅宿へ

参るより、あ、から直に拙宅へお出を願つて、不
忍の枯蓮に時雨の、る景色を御覽てハ如何
なものてござりませう、喜「い、うさま、夫を面白からう
。幸ひ今日、用事もな、をば久、て御同行を
願ひませう。と直に連立て池、端、至れば、主人
ハ一足先へ這入、お、お、矢間さん、お出だ
よ、喜「オヤ、是ハ入、つ、や、ま、し、寔に御めづら
き、ふてござりませう。サ、如何ぞ二階へ御通り
下、さ、ま、一、然らば御遠慮、お、し、に御免を蒙、ぶ
らう。實に、一、別、以、來、貴、家、て、お、變、ハ、な、く、て、結、搆、

だ 鉄下り 御出府とございませぬか一向も存じ
ませなんだ 喜「イヤ是れからころ疾に伺ふべきだ
だが浪人いたした其後今日乃活計に追れ諸
方を奔走してばかり居れば御無沙汰段ハ御
免下さい 宗「何の御無沙汰ハ御同前だが昨
年此事件以来矢間君にハ何方にお住居りと存
じてゐたが先刻も申通り織部老人に面會して
御出府乃様子も知れ頻にをなほかしく思つて
ある處で急に御目に掛り度事が出来ましたに
付て今日雨ゆゑ御在宿であらふとぞんじ未

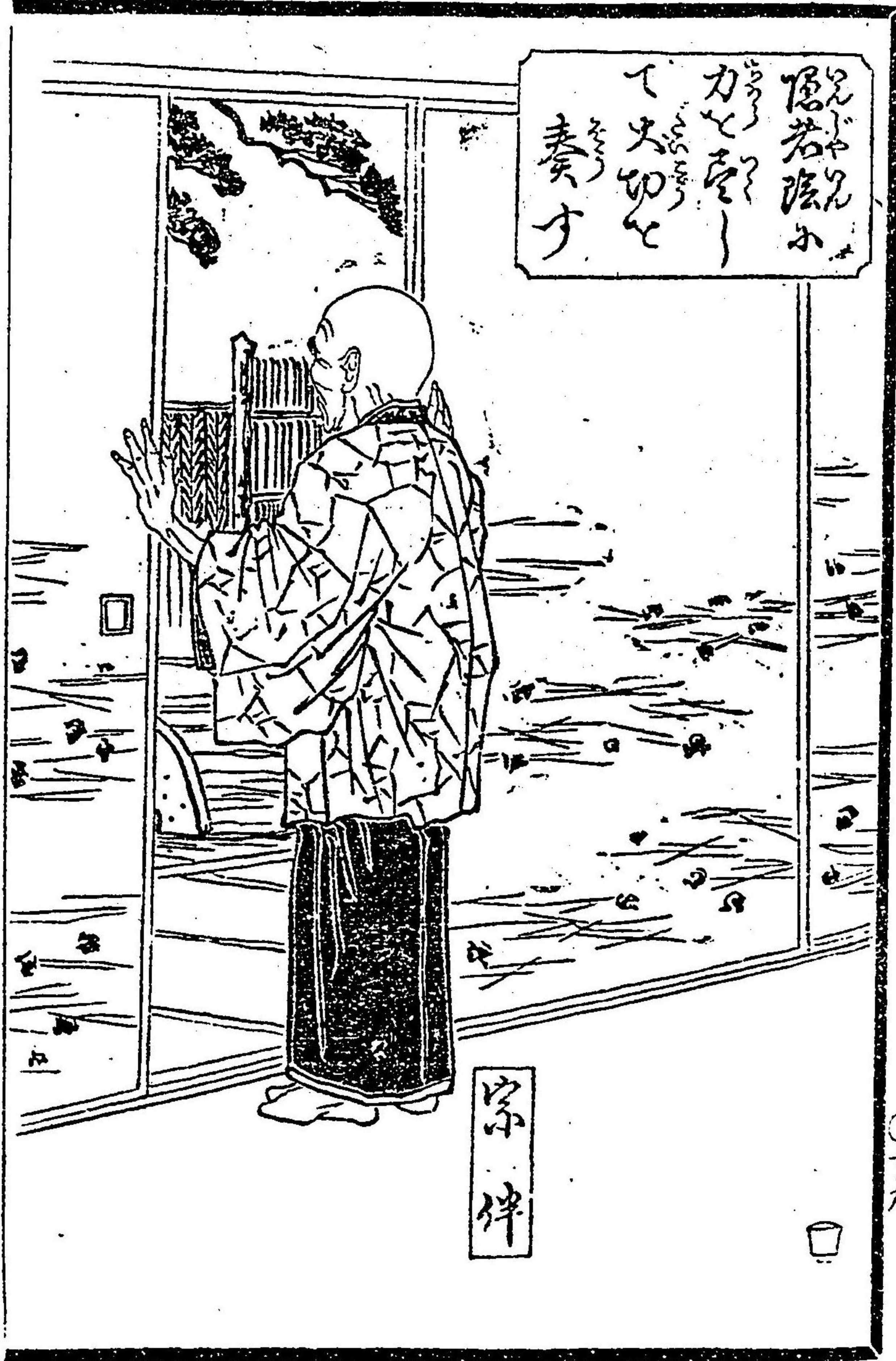
定かおらに石町邊で御旅宿を尋ねてゐたと
る。マア何のかくやも久し振て寒から何か
早く持て来てくんなよ 喜「ハイ只今支度を致
して居ますがお寒いから鳥鍋にても致しませ
うか 宗「鳥鍋かどうもよからうよ 喜「いや必
お構ひ下さるゑ此二階から見る池の景色が何
よりの御馳走だ 宗「明ると寒くてつけませんよ。
火鉢代傍へお出かさいました 宗「伴ハ膝を進め
先年拙宅へお尋ねあつた時ハまだ判官公御
存生であつたが實に何とも申上やうもあつた仕

合せ。明れ。バ。モ。ウ。三。年。に。成。ま。す。が。實。に。光。陰。ハ。矢
也。如。く。て。ご。ざ。る。て。聞。て。喜。兵。衛。ハ。目。を。屢。た。く
き。尋。い。や。そ。う。赤。穂。退。散。也。一。件。ハ。誰。に。て。も。會。ご
と。に。ま。て。く。悔。み。を。言。れ。る。度。に。思。ひ。出。し。て。ハ。悲
し。く。ね。る。が。別。て。舊。同。藩。也。足。下。ね。ど。昔。話。し。を
初。め。る。と。只。何。事。も。夢。也。や。う。に。思。は。れ。ま。す。て。宗
三。年。前。よ。久。く。で。此。家。へ。お。尋。ね。下。ま。つ。し。時。に。何
か。一。廉。也。功。を。立。て。鹽。谷。家。へ。歸。參。す。る。氣。ハ。ね。い
か。有。ね。執。成。を。し。て。や。ら。ふ。と。仰。れ。有。し。ハ。昔。也
友。誼。を。忘。れ。ざ。に。御。心。切。な。事。て。あ。る。と。感。心。し。其

節。の。御。一。言。が。肝。に。こ。し。へ。今。以。て。忘。れ。ハ。お。き。ま
せ。ん。夫。ハ。只。何。心。か。く。申。し。事。を。さ。ほ。ど。迄。あ
つ。く。御。心。に。止。ら。る。ハ。却。て。赤。面。至。極。か。と。け。だ
が。歸。參。也。一。件。も。基。が。絶。て。ハ。御。同。前。に。殘。念。至。極
さ。併。し。足。下。な。ど。ハ。早。く。か。ら。商。業。に。就。し。か。御
不。自。由。ハ。な。か。ら。う。が。中。に。は。實。に。目。も。當。ら。れ。な
い。程。困。窮。す。る。者。も。あ。つ。て。氣。の。毒。千。万。さ。宗。何。事
も。時。節。の。到。來。忘。し。の。で。此。一。件。を。赤。穂。の。藩。中。一
同。の。天。災。だ。か。ら。詮。方。が。な。い。と。諦。め。る。よ。り。他。ハ
な。い。が。其。前。に。退。身。忘。し。と。い。い。へ。此。宗。伴。も。歸。參

とす。所存のあいごと仰しやる君のお詞を有
難いと骨身に染て思ふほどなれば聊か義とい
ふもナそうらしいが骨董渡世ハ忘てゐても何
か御用に立まともあらふと。君に御目に懸つ
うへ。大事をイヤサ。大事の道具を唯一品御禮に
進上致しさいと。今日とぞくお迎へに出かけ
所さ。身不肖な拙者如きが御推舉申といつ
處が。覺束ない話してゐつたが。足下は其御了簡
があつたのから。嘸御残念な事だつたらう。併し
其位の事を申たとして大事の品を禮と報ふと

とハ。如何な品かハ存ぜぬが御無用な成さるが
よい。折もあつたら又頂戴する時節も御座らう
宗「イヤ。是ハ如何あつても。差上ねば心の澄ぬ
から御辭退かしよ受て下さい。併し斯うお話し
がまじめな成てハ。氣が詰つて酒も旨くさい
ら。モウ一盃温い所をお重ねなさい。と喜兵衛が
盃へかみくついで。身と起し袋戸棚の内より
姫路革の文庫を出し。帳面類や反古の下りら
紙に包みし物を取り出し。喜兵衛に渡して聲を低
め。宗「唯今進上ささいと申す品ハ。君御一人ばら



りてなく。亡君の御恩を忘れぬ大星どのを始め
とし。忠義に凝り方々へ。今の鐔屋宗伴てハかい。
昔年の同藩服部右内が進上致す此一品御覽の
上で御受納下さい。亡君の御高恩を忘れぬ面
々へと云る。御志の贈物ハ何てあらふ知らん。
と上包をとり開き見て。思ハぞ小膝を礎とうち
喜「あつぱれ」右内どの。我々が心中の機密を察して
取獲られたる高野家の邸の繪圖。先ごろ岡野三
十郎が同家へ出入の大工より陰に得られど。是
ハ其圖の中よ書洩しゆる。茶室水屋の雜作との

せ。數寄屋の庭より馬場へ出る抜道などハ誰も
心の附ぬところ。斯う明細よ寫されハ我々が
爲の六韜三畧。如何して是がお手よ入らぬ。此
見取繪圖を暗記よ。毎夜ぼつ。書まよ。其子細
ハ。娘のお糸を嫁よ。か。いと懇望する富多屋と
いふ町人ハ。代々高野家の用達としてゐるを幸
ひ。愚妻とも申合せて。早速よ縁談を整へ。其のち
笹。帝の茶入を高野家へ賣込む爲よ。鷹坂へ賄賂
を贈り。茶代相手よ。まで出るやうよ。成た。一伍四
什を悉く物語り。夫より同家へ忝る度よ。座敷敷

や庭廻り様子も目注して此通りも寫とつた
大星どれを始めとして忠臣無二れ方々が種
くよ變名して追くよ江戸へ下れる容子とい
ひ他家へも隨身せど商法れ目途もなく遊んで
められるハ正しく復讐れ御企と曉つゆゑよ。
宗伴も一ツの功を立やうと存じ娘を囿漸く
と寫取此繪圖も亡君へ万分が一の御恩報じ
と存ぞる爲今とあつてハ歸參を願ふ御家もか
けれど御存生中致すべき御詫も換る此一品諸
君が本望をお遂の後ハ御靈前へ御備へ下さい

就てハ敵討の御供も願ふべき處あれど町人
と成て老衰し久しく武器も手に探ぞ殊にハ敵
かがら師直よ寵愛されて貰つた物などもあり
またら。今更よ敵と名乗て妨主あたまを振立
かがら切込といふわけも行ぞ又二ツまハ七
君れ御存生中よお暇の出る者が其お詫も致さ
ぞよ濫よ敵討の列よ加はるといふ道理もかい
から。此義に於てハ願ひませんと大星殿へも宜
敷きやうよ御披露下さい。といへば喜兵衛ハ彌
く感心して高野の邸へさほどまで親しく出

入とされるとい。一向よ志と入るが。猶此上も心をつけて。師直が在宿日をお知らせ下さい。彌く討入の日を決定し。容子を聞き参るてござらう。何ハ鬼もあれ此品を大星氏に早く見せて喜ばせ。足下の御功勞をも話ませう。是と云も笹帝の茶入ハ義士の面々が春を俟れる吉兆のよい賣物をかされたかア。と喜び勇みて立歸りしが。果して復讐の時に至り此繪圖の爲に便利よく。大功を奏したるは昔を忘れぬ宗伴が。忠畧のする所なりと。良雄を始め一同が只願

感賞したりしとぞ

正編より引續たる宗伴が話爰に終る

〇第四回

夜ころ聞け穢多が太鼓ほととぎす。と晋子が詠し吉原の柏子木にさへ嘘ばかり。月夜ハかいと譬へたる。晦日に切迫る更衣も可愛い男に浪費て。中は空しき重簞笥に寄りつゝ其夫の便運と松葉屋。遊女常盤が鬱悶てる所へ廊下をばしと。馴染の茶屋ハ婢お近が箱提燈持て先よ立近。おいらんエお久し振て正さんが。オヤ忘も忘ないで如何し。んですエ。頃日來待

きつてぬまいたよ。正「其怨言ハ百万ひやくまんだら聞きだら
ふと覺期かくごハいて來きたが。帶「オヤ大たいえう善よい心懸こころがけ
だね。種いろくく代用ようがあるから。脚夫きゃくふが京橋きやうばしの方はうへ出で
る度たたびは築地つきぢへ廻まはつてもらつて。手紙てがみを出だささい
日ひハさいのだよ。倦うだとも潰つぶれるとも皆無かゝお返へん
辭じあしハ實じつよ子こエお近ちかきん呆あきかへつつ人ひとだよ
とナヨイト突つき飛とせば。正「是これは是これは」曰おれよハ一ひと言ことも云い
せさいで。然さう無む法ぼうな怒おどる事ことハかからふじやア
さいの。此この方ちよもいふに言いれさい難儀なんぎを理わけと云い
る所ところが始はじまらさい。マア左ひだりも右みぎも一ひと盃ばいやる事ことと

忘わすれやう。近ちかぞん何なにか誂物あつらへものをして來きておくれな
進ま「何なにが好ようございませうね。エ娼妓あやう「吾わ儕せいハ何なん
でも好よい。正「昨きのう今けふハ大だいぶん暑あつく成なて來きるから。極ごく
淡あつ薄はくしし物ものがいるね。何なにか見みつくるつて大急おほいそぎ
で頼たのむよ。近「ハイハイ。長ながまりましたト出いて行ゆより
程ほどもあく。禿かぶろハ膳立ぜんだてをして酒さけを温あめ、頭あたまで誂あつらへの
臺だい代物ものも來きて。酒宴しゆゑんのくたく。ハ例れいに如ごとくか
れハ省はき酒食しゆじよくも大おほかた終まりければ。近「ナトお方付かたづけ
と致いたしませうト奥おくの本間ほんまへ床とこを敷をせ。羽織はおり衣服いふく
をたとむで。廣蓋ひろがたの上うへに置おき。近「サヨナラ明みやうは

極早く御迎ひに。娼妓お願ひ申ます。と云つゝ茶
屋ハ歸りゆく。跡に二人は差向ひ。常磐は寐てゐ
る客の上うへに身みを寄懸よせかけて。莨たばこを吸まつて出し。常とん今
夜は大たいそう話はなが有あるから寐ねて。はいけかいよ。サア
睡ねと禁きん儻たうますよ。正せい「ヨシ」く決けつして寐ねやア。志しかい
よ。併しし聞きた處ところが追付おっつけない相談さうだんだらうと察さつする
が。お前まへもこの樓うちで。店の筆頭おしとこと。夜食やしよくとかい
ふ面かほで見みると。此この更衣うつりかへがむづかい。くつてハ。外聞ぐわいぶん
も悪わるし。定さだめて面かほも立たまいが。巳おれも盛谷もりや家の馬廻うま、はり
役やくと務つとめる。速水はやみ正左衛門しやうざゑもんが耻はまい話はなしたが

悉ことごと皆ごと此この樓うちへ入いりあげて。志しまつて。實じつの處ところハ。指替さしかへの
大小だいせうも疾はやに質庫あつらへ入いりて。今いま指さてゐる中具なかぐかどハ。
竹たけみつ同どう様の鈍刀とんばと換かつてゐるわけだから。此この
更衣うつりかへの紋付もんづけの裕あはせかども出で來き兼かねる時宜ときぎき。是これてハ
武士ぶしの心こころがけが濟なぬと我われか。がら此この體からだに愛相あひまが
つきるが。借か今いまと成なつてハ。如何いかも志しやうもか。一ひと是これ
といふも到底とつぱりこの常磐とんぱといふ古狐ふるきつねに恍惚ほんやうさせ
られた故せさ。オヤ止とめても。吳くれよ。何處どこを押おせば
ん音ねが。出でるだらふ。吾儕わがしの方が幾いくら恍惚ほんやうさせ
られたか。知しれやア。志しかいよ。是これも惚過ほれ過ぎたのが身み

の誤りだと思ふが。此罽際このつばさばに成てから愚痴ぐちら
くいふ事もかいからねエ。正「おどろ虚涙うらみを溢こぼし
て他の情夫いとこに浪費いりあげたのじゃアかいウエ。常「如何どうす
れば然さう憎にくい口くちだかふト抓つかる。正「オ、痛いたい先刻さうき
めら替か儼げんられたり抓つかられたり。大へんに非道ひだうい
目に遭あふ晩ばんだ。常「マア如何どうてもよいめら肝腎かんじんの
相談さうだんを身に染しみしてとくんあさいよ。今も聞き運とほ
りのわけでハ差詰さしづめお互たがひに如何どうにも法ほふがつか
かいねエ。と溜息なげいきをついて俯向うつむいてゐる面おもを覗のぞき
こみ。正「何なにもさう弱よほつたからとて足たりねエ金かねが地ち

から漏わもしあいら。智恵ちゑを振ふるつて。茲こゝに一ツの
妙計めうけいでも何なんてもかいか。塩谷しんや家の御祈願おんぎくわん處じよに眞
福院ぶくわんといふがあるが。其住職そのぢうしやくの和尚おしやうさんハ。舊播
州産しゅうさんれで巳おれが未まだ幼稚ちひさて國くににゐた時ときぶんめら
心易こころやすくしためら。今いまでも時ときく遊あそびに行いつて碁ごの相
手てあどもするが。至いたつて開ひらけた面白おもしろい和尚おしやうだか
ら。眞福院しんぶくわんへ泣なついで二三十圓にじゅうさんじゅうげんほど如何どうかして
貰もらへば。お前の曲まへのかまの物ものも出でる。茶屋ちや其外そのほかへも少
一宛つづハふりうけかたれば成あら。アト言い出だ
す。極きまりハ悪わるい。翌日あしたハ幸さいはひ非番ひばんだか。一日いちにち



〇一六



碁の相手を勉め好機会を窺て依頼て見やうよ
此際で少しでも金策が出来ると都合が好い
乃れども左う旨く行だらうりね正行てもい
ああいでも底が歎つく所だめら出家ハ人を救
ふのが役目だめら否でも應ても常磐の物前を
お救ひ下さいと無理よも口説つけるのさ何
だねエ馬鹿くくしい他は據るかい入用がある
とでもいふわけなら解つてゐるが常磐の難儀
を救つて呉るとハ淨瑠璃の宗清じゃアあるま
いし正「フム宗清と思ひだし。若金が出来かいと

いへば施主のな石塔などハ估却しても是非
王面をさせるハな「はくはんとうよ何時ても
平氣お人だね正「オヤ泣言相談よ夜を更して
彼拍子木ハモウ引だぜ何よしても酒が理よ落
て折角好心持よ成よのが盡醒てしまつて如何
も睡就れさうもかいが未だ有なら一盃飲して
くんかよ「それはいよが生憎火が消て鉄瓶が
冷く成てしまつたよいけあいね正「消たら
消たで禿を起さざともよい冷酒で青つきりと
やらがすのさ「うれでも冷酒ハ毒だといふよ

正「イヤ是でもお前の了簡ほど冷たくハないか
ら。澤山毒にもなるまいよ。正「エ、又始まつたよ。モ
ウ好加減におしなさいよ。と寐轉である上へ身
を寄付けて。白丁の湯呑へ次ぐ。正「さうやけに
次でハ溢るぜ。と一息に飲干して舌打をしあがら
正「ア、甘露。く。正「うんかに飲てばかりあると。
今にお酒に中られて血を吐ますよ。トいふ時に
月夜を越る時鳥の聲。橋子を洩してテツペンカケ
タカ。正「フム時鳥の。左の耳で初音を聞と吉兆
があるといふから。如何ぞお金が出来ればよ

いねエ。と衾を、ゆついで一眠し。未だ明ぬ間に廊
を立出一端屋敷へ立戻り髪を結ひ洗湯に入り。
又出直して下谷廣小路三橋際の駿河屋にて新
製の礮邊湯皮の折を買て土産とし。真福院へ趣
き案内を乞ひ座敷へ通つて待間程おく。住寺の
和尚ハ出来り。和「これハく御珍らしい。速水さん
ハ久しく御出がなから若御不快でハあから
ふかと。御案事申て毎度お噂を致して居る處で
あつた。正「ま、申しけりもあつた。大御無沙汰を致しまし
。花盛の頃よ上つゝ限りござりました。お。忽地

よ一面の青葉の景色とあり。お庭の牡丹が大そ
う奇麗な咲ました。家老の大屋ハ此牡丹が大
好で。國でハ牡丹の大盡だと云れる程でござり
ました。斯か大輪の花ハ見ない様でござりまし
和「さうく由良之助殿の牡丹を愛さつゝやる
事ハ御城下で誰知らぬ者もない風流なお人
あるて。お話よ紛れてお禮を失念し。お唯今ハ
何よりの御土産を項戴して有難ふ。此味ハ極淡
薄して一杯の下物ハ極美品でござる。テ正「お
禮で痛入ま。い。時ハ大そう日も永く成ま。い。い

から。何も御用の御差支がなくば碁のお相手
願ひませう。和「イヤ此どろハ徒然でこまつて
ある。處へ。僥倖のお出。久一振で一勝負ぜ。ひと
願ひ度處だ。オイ。華次郎や磐と石を持って來な
よ。ト寵愛深き小姓をよべば。華「ハイ。く畏まりま
し。と。黄八丈の裕。御納戸仙臺平の袴をば。い
大若衆が。所化と二人よ。碁盤を持來り。是
ハ速水様能う入。つゝ。や。いま。した。寔にお遠くし
ふ。ござり。ました。正「唯今も。う。のお。詫。を。致。して。居
るところ。君にも。いつ。も。御。異。りが。あ。く。て。結。構。で

ござります。今日も又例の通り御厄介に相成て
 おやかましふござりませう。旦那も相手か
 かいのて待幢れてお出でありました。和「然らば
 例の通り御免を蒙ります。ト碁器の蓋をすこし
 明て見て白石を採ば。正「何のお弱くせに。和「イヤ
 優さうに云ても齒も立ますまいと互に勝氣の
 石配り。正「斯う繼ぐ。和「どつこい。然ハからぬ。ト盤
 にむかへば無中に成て。三四番ほど戦ふうち申
 刻の鐘の聞はれば。和「ユレ。華次郎や御酒の
 支度をして來かいか勝負に實が入て。嘸御空腹

てあつたらふに。華「疾に支度ハ致させて置ま
 た。正「さやうならば。先是迄にして。一献頂きませ
 う。和「サア是。和「ハ酒だ。と庭の牡丹を
 見ながらに差つ押へつ。主客とも。酒宴に時をう
 つしけり

正史續いろは文庫第二輯終

